川柳マガジン東京句会 2008 年 1 月 13 日　句評会

青地は帆波の総評
黒字は参加者の評
赤字は作者のコメントです。

蝉ほどに絶叫したか問うてみる　倫也
心象作品に見られる自問自答の句。「蝉の絶叫」というと陳腐だが「蝉ほどに」という表現が、自問と自省の感情を上手く引き出している。
(きみ)何に絶叫したのか、何に向って絶叫したのかを知りたい。
(利江)自分が蝉のように表現しきってきたのかという思いが良い。
(竜雄)蝉は一週間しか鳴かないし、その中で人生の主張をする。人生訓として良い句だと思う。

ネットカフェ僕を検索できません　帆波
ネットカフェ難民の事か。「検索できない」＝「自分が見つからない」という比喩。一般受けするかどうか
(京子)検索できないという哀しさが出ている。
(耕平)「出来ません」という口語の効果に疑問。
(達也)知り合いに漫画の原作を書いている人がいるのだが、
(淳隆)都会の闇に埋没している自身の状況をよく表していて、暗いけれども面白い。
「できません」の部分と「僕」という言葉で悩んだ。未来が見えないということを表現したかったのだが・・

お互いの嘘の喉越しコクとキレ　耕平
「嘘の喉越し」は面白い表現だが、下五がパワー不足。「喉越し」で「コクとキレ」と続いてしまうと折角の「嘘」が引き立たない。下五を検討してみたい。
(キノコ)嘘を飲み込む時の苦悩がもう少し欲しい。
(きみ)「嘘の喉越し」という表現が面白い
喉越しとくればコクとキレだろう。お互い嘘を付き合っていることを判っていて、それを評価しあっているという状況を狙った。コクのある嘘、キレのある嘘。

ＫＹは空気読まぬが風は詠む　団扇
「読む」と「詠む」のニュアンスの差をKYという流行の言葉と組み合わせることで浮かび上がられた作品。残念なのは「KY＝空気が読めない」の意味なので、重なってしまった事。

（三十六）流行語にも選ばれたKYだが、ご存知でない、使った事のない方も多いのではないか。
（くんじ）　KYは最初今年もよろしくかと思った。
(利江)「ＫＹ」と「空気読まぬ」は意味が重なっている。

温暖化春一番が迷ってる　三十六
「春一番が迷う」という表現は面白いが「温暖化」との組み合わせは安直では。
温暖化で春一番が何時吹いたらいいか迷っているというもの。

お化粧の下から鬼が現れる　淳隆
「鬼」が現れてしまうのはちょっと直接過ぎるし、同想多数。要するに仮面で本性を隠すという発想。表現としては逆に鬼が化粧していくという方向なら違ったか。
(千枝子)実感できる部分があって面白い。
「地金」という課題で選ばれた作品。

終電車の美人お送りしましょうか　千枝子
「美人」と強調する必要があるかどうか。分かり易いのだが、くどい感じも。終電車に乗っている（または待っている）美人に酔っ払いが声をかける、というシーンに「お送りしましょうか」という丁寧な言葉が軽味をもたらしているのだが・・
(達也)親切心で声をかけたら痴漢と間違えられたという事例を聞いたことがあるが・・
「終電車」を「終電の」としたい。送り狼の意味です

初春(はる)の膳痩せた絆を撚(よ)り直す　利江
「痩せた絆」という表現「絆を撚り直す」という表現がいい。舞台が正月なのも夫婦の歴史、日常を感じ取れて秀逸。
(闘句郎)「絆を撚り直す」というイメージが沸かない。「絆を太くする」では。
太くすると仰ったが、初春の膳とセットで、普段は縁遠くなっていても初春がそれを撚り直すと取っていただければ。

目鼻立ちハッキリしても語尾弱い　ゆう子
「語尾弱い」で表される言葉がどのくらいネガティブなのかが判りづらい。またこのような場合「弱い語尾」と体言止めにすることを検討してみたい。
（三十六）　下五「弱い語尾」と入れ替えて比較してみたい。
(耕平)「語尾が弱い」ので体言止めにしないほうが、弱い感じが出ていいのでは。
最近の若い人の語り口、話し方の特徴を表現してみた。下五に関して「体言止め」とそうでない意見が出たが、どちらも大変参考になった。

野鼠は雪に偽装の白になる　竜雄
「偽装」という言葉を使ったのはタイムリーな言葉だからであろう。「は」を「も」に変えてより時事的にしてはどうか。
（京子）「野鼠も」「偽装の白と」と比較してみたい。
野鼠は白にならない、野兎は白くなる。この野鼠は社保庁始め社会の不祥事の中、また表に出ていない人たちが「自分はそんなことないよ」と偽装しているだろう、ということを詠みたかったのだが・・

青春譜裂けたムンクの叫び声　闘句郎
「ムンクの叫び声」はもったいないのでは。音字数も多いし、一つの名詞になっている。「ムンク」だけでいいのでは。
ムンクと叫び声はセットだと言われたが、叫び声までいわないと句にならない。
過去に夕刊紙で入賞した作品。

ソレキリノヒトデ　ソレナリノツキアイ　以呂波
全て片仮名である意味がわからない。視覚的に「ソレ」「ソレ」の重なりに面白いものを感じるが、言葉として面白いものではない。句意と表記には作者の意思が欲しい。
(きのこ)面白い。上下逆にして「ソレナリノツキアイ　ソレデキレタヒト」
と比較してみたい。
(倫也)男女の仲ではなく一般的な人間関係だと思うが、何故カタカナ表記なのかが不明。
普通に書くと当たり前の句なので、片仮名にするとゆっくり読んでいただけるかなと、ソリキリとソレナリの対比を狙った。

右脳まだ叩けば少し作動する　きみ
昔の家電と、自分の頭を同一視させたところが面白い。「作動する」という言葉は適切かどうか。「叩けば」という部分で昔のテレビなどを連想してもらえると考えるのは読者に甘えすぎているか。
(闘句郎)昔の家電はそうだが、今は想像できないのでは。
(利江)人の才能は表に出ているのは氷山の一角で、もっともっと奥に隠れているものだという、瀬戸内寂聴氏の法話を思い出した。
叩くとは昔の家電を思い浮かべた比喩（前後聞き取れず　帆波）

黄落が札ビラならと暮の街　くんじ
「黄落」が「舞う枯葉」などであったら、下五「暮れの街」とまともに重なってしまうのだが、「黄落」という言葉で、ある程度その点が回避されている。しかし、ある程度であ

って、上五と下五が重なっている事には変わりない。
(以呂波)切羽詰った状況でありながら「黄落」と落葉を観賞しているのが面白い。
(利江)たくさんの落葉がほんとにお札だったらと思うと面白い。
(淳隆)下五「暮の街」を「思う町」として比較してみたい。
(作者コメント聞き取れず　帆波)

猫のいる我が家にも来たネズミ年　京子
猫とネズミという敵同士を並べた面白さを狙ったもの。猫がいるのは我が家だけではないところが残念。
毎年の年賀の作品の一つを持ってきました。

子育ての母は夜叉にも菩薩にも　まもる
同想過去に多数。「子育ての母」という限定はどうだろうか。大人になっても母は母とも言える。また一人の母でなく、世の母、世相という見方をすれば、夜叉のような母も、菩薩のような母もいる、という解釈が成り立つが、そうなると「普通は母は夜叉ではない」という大前提を「菩薩にも」とい形で重ねてしまうことになる。句の姿が良く見る形であるだけに、作者の意図の広がりを持たせられればなと思う。
(絵扇)子育て中の自分の中の「夜叉にも菩薩にも」と捉えた。
(以呂波)よくありそうな句だが、現代を見ると夜叉で終ってしまうような事件が多すぎるので、この句のように菩薩になる面も学んで欲しいと思う。
(きみ)これまでもよく詠まれている着想。「子を守る母は夜叉にも菩薩にも」など。夜叉と菩薩を並べたものも多い。
(竜雄)子育ては何故「母」だけなのか。「父」「夫」が子育てに現れないから「母」が夜叉になったりするのではないか。悲しい母の唄だと感じた。
(淳隆)少子化の現代を考えると「子育ての」は「子沢山」としたほうが分かり易いのでは。「夜叉にも菩薩にも」の部分で「なり」を省いているが、助詞止めはいただけないのでは。
(倫也)最近はこういう事件が多いが、それは情報化によるもので、昔を美化しすぎているのではないか、昔も今もそんなに変わらないのでは、あえて現代を表している句ではないと見る。
同想、同類多数ということは認識しており、実験的にここに出したのは「にも」「にも」という作り方をどのように評価いただけるかという点です。

お話の中なら愛すべきねずみ　きのこ
干支に絡めたネズミ。駆除対象としてのネズミ。の作品が多い中「愛すべき」ネズミを見つけたのが手柄。

(京子)メルヘンチックで良いと思う。
(耕平)「お話の中なら」の「なら」に引っかかる。「なら」によって着想が限定されてしまう。普段は愛すべきものでないようなネズミが愛すべきものになっていることの具体的なものが欲しい。
(きみ)やはり「なら」にこだわる。「なら」とせずもう少し広角な表現がないか。
(千枝子)小さな子どもにお母さんが、絵本を読んであげている情景が浮かんで楽しい。
「なら」を「では」としてみるとどうか検討したみたい。

留守電に借金取りの叫び声　達也
「借金取り」が「叫ぶ」とは面白い表現だが、イメージとしてはどうか。だからといって「低い声」などではそのままになってしまう。
(闘句郎)借金取りをセールスマンとした方が広がりが出るのでは。
(きみ)「叫び声」という表現は大きすぎるのでは。
(竜雄)間違い電話で取り立ての絶叫を聞いた事があるが、そのときの印象を思うと実感のこもった作品だと思う。
知り合いに実際の取立ての声を聞かせてもらったことがあり、そのイメージから作った。それが関西弁だったので「叫び声」となった。

七草で腸整えて肌プルリ　絵扇
下五「プルリ」が面白い。しかし「七草で腸整えて」は当たり前のことになってしまうので、言葉の面白さだけの作品になってしまった。
中から綺麗にするという意味